

NUA PRESS '90

1990年10月1日発行
 発行人／酒井 豊
 編集人／水谷優一
 ブッシュ・クリエイティブスタジオ
 発行所／〒481 愛知県西春日井郡西春町徳重1
 名古屋芸術大学美術学部同窓会事務局
 電話(0568)24-0325

1



人と仕事

造景を考えると
自然になぞるのが一番なんだ。

梶田 慶一郎

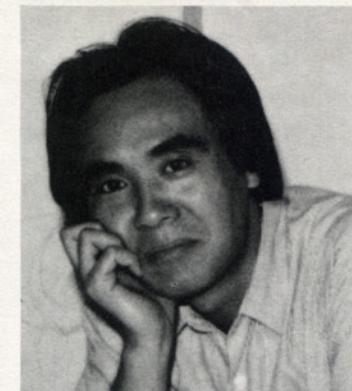
昭和48年度卒業(1期生)

造形作家

ZOOM環境造形研究所主宰

Atelier 濑戸市鹿乗町33

☎ (0568) 51-0648

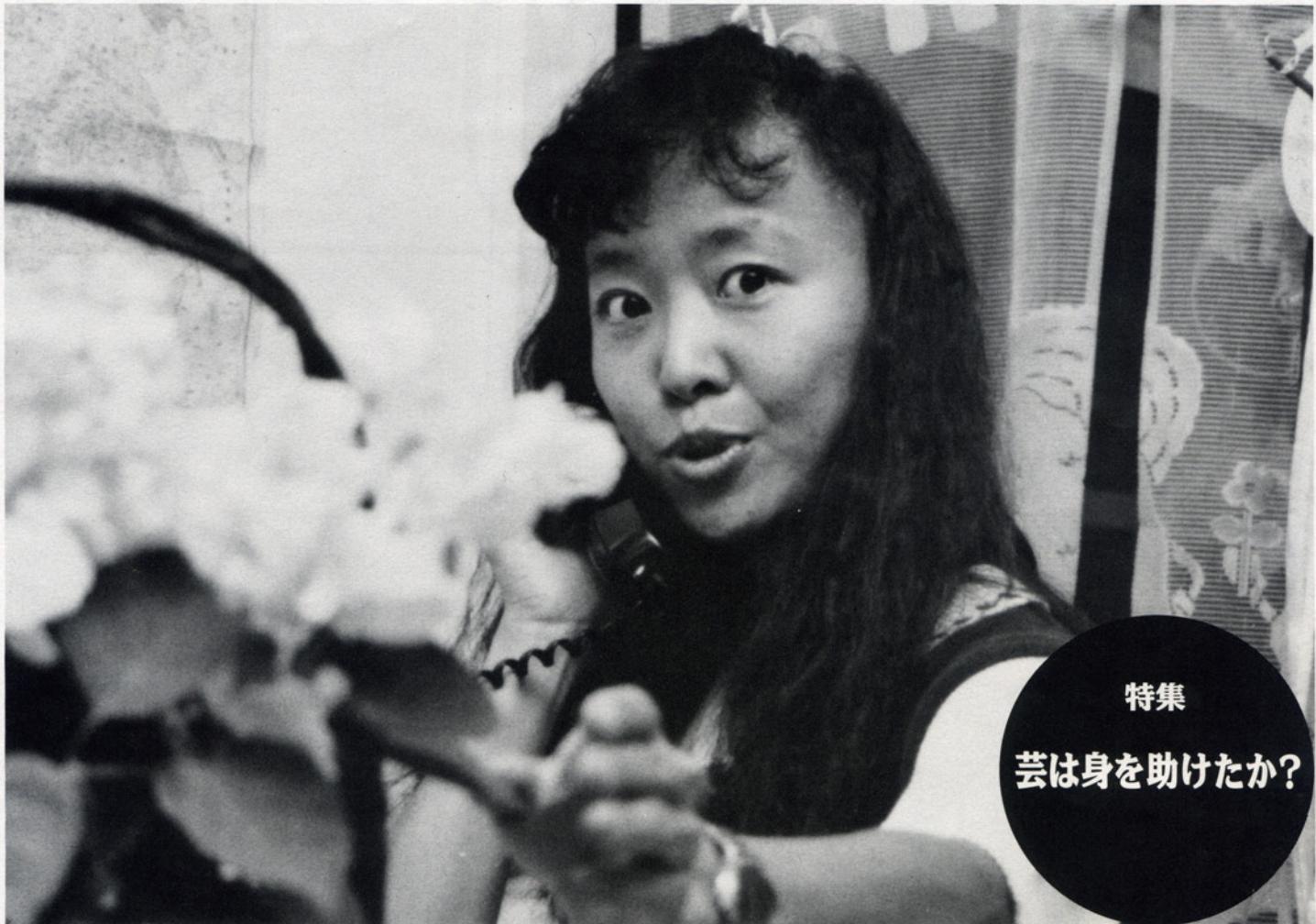


近く全線開通する伊勢自動車道のサービスエリアのモニュメントを制作(上写真)。依頼されたテーマは志摩サンベルトリゾート整備事業にそつたもので「風で動く」。それなら渡り鳥と潮風のモチーフでいこうと、制作にかかる。「モニュメントであって、シンボルでもあるような、皆に親しまれる表現が出来たんじゃないかな」と梶田さん。

作品の制作はまず方針を決め、構想、計画とプランニングしていく。その思考方法はアトリエの中だけでの制作から社会の中に飛び出して身についたものだとか。「母校卒業後、愛知県立芸大の大学院を経て彫刻家の看板を上げたわけだけど、なかなかクラッソック(彫刻)一本でやってくのは厳しくてね。ディスプレイとかいろいろやったよ。いまも短大でデザインを教えるし。それで、社会との関わりを持てば持つほど、今までのよう芸術至上主義でモノを創っていくのだけが彫刻じやないんだって思つた」とキッパリ。

造形作家という肩書にはまらないスケールの大きい仕事をこなすようになった最初のきっかけは、南知多ビーチランドに制作したベンギンブールが高い評価を受けたこと。それから、リトルワールドの造園計画参画など徐々にランドスケープ・プランニングの仕事が増えていった。最近では、母校の近くに完成したコミュニティー道路にも参画。「造形作家といふより、造景作家といった方がぴたりだな」といつて差し出された数枚の名刺の肩書がそのことを物語る。「不思議なもので、造景をやり始めてからのはうが造形物(モニュメント)の依頼が多いんだよね。で、ランドスケープを考えると、人間は土に帰るべきものだとわかる。自然になぞるのが一番なんだ。いまクラインガルテン(市民農園)に興味を持って色々構想している最中で、アグリカルチャとしての土の文化という意味にも共感している」と計画中の河川敷造園プランを前に語ってくれた。

「学生時代は学生運動とか色々やつたよ。勉強はそこそこだったけど、学生の人数が少なかつたから深く付き合えるのが名芸の良さだったね。いま自分を含めた同級生がようやく評価される年代になって、今度は引っ張り上げる立場になつたんだなあと、最近つくづく思うな。才能は後押してあげたいね」



特集

芸は身を助けたか?

株日比谷花壇の巻

空間を活かしたアレンジを心がければ、どんな花でも綺麗に見えると思うんです。

創立以来二十一年。わが母校から二千余名の卒業生が社会に送り出され、いろんな場で活躍している。そこで、現在同窓生が多數勤務する株式会社日比谷花壇を訪ね現在の仕事と学生時代に学んだ芸(芸術)は身を助けていたかをきいてみた。

どの企業で一番沢山同窓生が活躍しているのか、という素朴な興味から同窓会名簿をチェックしていくと、意外な社名が浮かび上がる。(株)日比谷花壇がそれだ。日本画科、洋画科、商業デザイン科、彫刻科卒業の10名が現在活躍している。商業デザイン科卒業なら印刷会社かデザインプロダクション。工業デザイン科卒業ならメーカーなりデザインプロダクション。洋画、日本画、彫刻科卒業なら教員関係があまあ妥当な就職先であるのだが、(株)日比谷花壇の名前は上がつてこないだろう。が、そこで活躍する同窓生の仕事ぶりをみると、やっぱり芸は職場できちんと評価されているんだな、と納得。

(株)日比谷花壇の名古屋ブランチは中区の生花市場に近い松原町にあるビルの二階にある。

「ディスプレイなどの仕事は自分の考えたプランが実際に形になって立ち上がる醍醐味と、お客様に喜んでもらえる充実感がありますね。パースも自分で描くんですよ」と昭和61年卒業14期生の酒井俊彦さん。装飾課に所属し、洋画科卒業なのにディスプレイベースが描けるようになつたのは、一足先に入社していた一年先輩の洋画科の太田さんにシゴかれたからだと笑う。その太田さんは学園祭のバザーで繋がりができ、それが縁だったとも。「バザーは売れて、売れて、みんなで飲み会をしたのが学生時代の一番の想いですね。絵は水彩なら、いまもまたまに描いていますよ」広告関係の仕事やシンシア

山手、バルコのクリスマスディスプレイなどのプランニング。建築家と組んだディスプレイが多い。最近では、春日井市役所新庁舎内の人工ベンジャミンも彼のプランだ。プランニングのセンスとかバランス感覚などは洋画とも通じるものがあるという。

芸大卒業だからといって
特別に期待はしてなかつた

営業企画課課長の荒木さんは、「名芸大卒の人材は、ぜひとも毎年欲しいと思っていました」と言い切る。その理由をたずねると、「じつは芸大卒業といつて特別に期待はしてなかつた」と正直だ。続けて「でも、生花の消費が年々飛躍的に伸び始め、当社の社員も千二百余名を数えるに到つた今、従来のように生花を素材のまま提供するんじやなく、ラッピングしたり、アレンジしたり、ディスプレイしたりと商品提供が多様化してきたんです。で、同じ素材を活かすも殺すも感性なんです。彼らは我々が想像する以上のものを創り出す。感性が豊かなんですね。頭

「の中のものを絵に出来るのも強みでしよう」と分析する。

しかし、小ワザだけが評価されるほど世の中甘くはない。彼らの人間性も評価された結果、10名もの入社が可能になったのだろう。



みんな職場で、いきいきしてくる

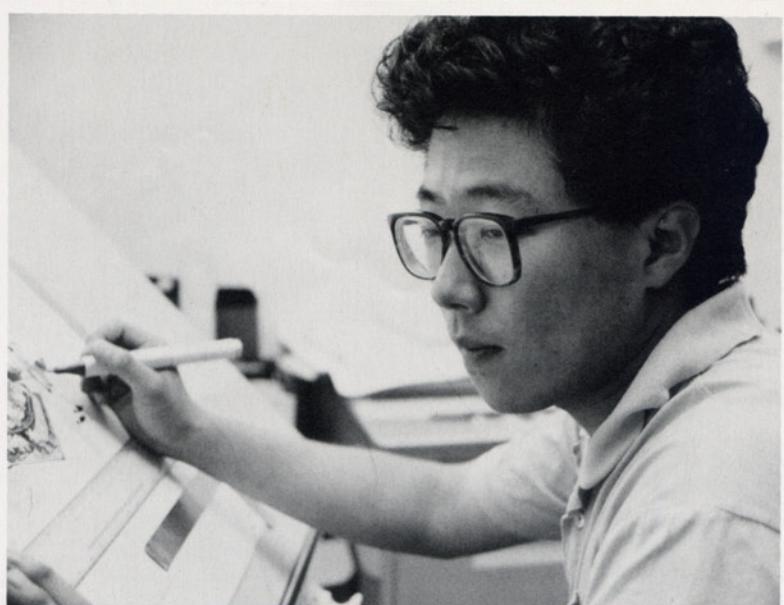
価を定めたからではないかと思い、荒木さんに聞いてみた。「彼女はしっかりとて、売上げもつくるし、マネジメント能力があるんですよ」名古屋で女性のマネジャーとしては二番目の昇進だったそうだ。

われて、みんなでアトリエで泊まって絵を仕上げ、朝になつて車に積んで出発したんですね。日本画卒の人達はみんなそのことを忘れてないと思います。いまでも県下に住んでいる同窓生の人達は時々会っています。最近は絵も描いていないし、いまの仕事で学生時代の芸が身を助けてるとは感じないけど」と西巻さん。笠井さんは田口先生から夜遅くなつて叱られながらも絵画以外に人生観など直接影響受けたとのこと。撮影のため、西巻さんに手早く作ってもらった花束はバランスが絶妙で、描画

かせた。
練日比谷花壇を取材してわかつたことは、本人たちが自覚していないのにかかわらず、各人学生時代に学んだものが自然に身についていて、それが彼らの魅力になっていることだ。

私事になるが、後日、義理の妹（名芸の同窓生）の出産見舞いのためアレンジフラワーを佐藤さんの店へ求めに行つた。残念ながら佐藤さんはお休みで、聞けば最近体調を崩しているそ�だ。はやい回復をお祈りしたい。

右頁写真
上写真左より 佐藤志奈子さん（11期）
西巻佳子さん（14期）
笠井 彰さん（15期）
右写真 酒井俊彦さん（14期）



個性が強いのか、何故か、名芸卒の連中は目立つんだよ。

株日比谷花壇の他には欄外リストのような会社に多くの同窓生が就職、あるいは一時在籍している。ただしデータは同窓生の自己申告から作成された同窓会名簿からピックアップしているので、精度は落ちるが、およその傾向はつかめると思う。デザイン科は殆どの学生が就職を前提としてデザインを学んでいるので、卒業後、デザイン関係の各方面に就職する。となれば、そんなに広くない業界なので、多くの同窓生を抱える会社がでてくる。じつは、デザイン関係の同窓生が一番多く就職、在籍した会社は、(株)電通の関連会社の株式会社(株)ジャパングラフィックスのラインなのである。そこで、昭和50年度商業デザイン卒業3期の小林正男さん(ジャパングラフィックスに在籍中)に話をきくことにした。彼の話から卒業してからの平均的なグラフィックデザイナーの姿が見えるのではないか。

「商業デザインの堀田先生の紹介で、最初は(株)電通に入社したんだけど、話が先生とたきの間ですでに決まっちゃって、断れる状態じゃなく、気がついたら、たきにいたって感じだな」と小林さんは当時を振り返る。堀田先生は(株)電通に在籍していられたので、(株)たきには太いパイプがあつたようである。1期の加藤恒久さんははじめ、(株)たき(株)ジャパングラフィックスに在籍したことのある同窓生は20名を下らないということだ。

「それで、いまは少しは改善されたんだけど、当時は薄給でね。忙しくてゆっくり自分のことを考えることも出来ないわけ。中には身体をこわす者もいた。で、まあ、学校と違つて社会ってのはこんなもんかなと思ってやってたら、3ヶ月位でベースがつかめるようになつたね」2年目に節目がやつて来る。日本碍子のC.I.展開を誰の手助けもなく、たった一人でやり遂げたことだ。「その一連の仕事が評価されて、ようやく、この業界でやつていける自信がついたね。一人前になつた、そんな気がしてうれしかつたな」と太い眼鏡フレームにふちどられた目が笑つた。それ以来、松阪屋、高島屋など流通関係のS.P.を暫くやつてから、転機がやつてくる。(ジャパングラフィックスに来てもう十年経つわけだけど、早いね。名古屋の事業所が発足した時から居るから、もう古参だよ」それまで、たき工房では、キャンプをつくつたり、版下をきつたりと自分の手でデザイン

ナーの仕事をしてきた彼は、ジャパングラフィックスに移動、ディレクターになる。(株)ジャパングラフィックスは(株)電通の関連会社で、名古屋で初めてのクリエイティブスタジオである。「そこで悩んだね。版下作業から開放はされたけど、いままであんなに忙しく毎日やつてきたことはムダだったのかなあつて」そんな悩みも次から次へと仕事をこなすうち、自然解消する。現在のジャパングラフィックスの組織は、制作部長の下、5人のクリエイティブ・ディレクターがいる。小林さんもそのひとり。彼の下にアートディレクター、コピー、ディレクターがつき、その下にデザイナー、コーラライターなど約10名のスタッフがついている。その錚々たる陣容で流通、メーカー、不動産などのS.P.展開をこなす毎日。「いくら忙しいからといって最近は徹夜はしなくなつたね。平均すると10時ぐらいいだな。もう40近いしね」と笑つた。15年以上も10時より遅く帰る日が続いたことになる。並みの体力じゃ勤まらない。ちなみに、小林さんの奥さんは同級生だった野村久美子さん(旧姓)。彼女のサポートがなければとても続かなかつただろう。「休みの日は、仕事のことは一切忘れて真っ白になつちゃうんだ。家には仕事関係の本も置かないしね」これが長続きするリフレッシュの秘訣らしい。

彼の部下にも名芸の後輩がいる。そこで若い世代

の後輩をどう思うか聞いてみた。「非常にサラリーマン化してきてるね。おつとりしてると、ハングリーナヤツは少ないな。でも、個性が強いのかしら、何故だか名芸の後輩たちは目立つんだよ。絵が特別うまいとかじやなくつてさ」(苦笑)

彼は一年生の時、学園紛争に否応なしに巻き込まれた。そして留年。「学園紛争では、みんな結束しているようで、結局はバラバラになつたじゃないか。裏切りとかも経験したしね。個人で頑張るしかなかつたよ。一年生からもう一度やろうつて決めたんだ。あの時ことは忘れられないな。で、社会に出てからも学生時代の芸は身を助けてくれなかつた」とさらりと言い流した。(デザインは自分のエゴで人の気持ちをつかむものだから、学生時代のうちに夢中になれるものを見つけること。それから、ものを知つて、よく遊べ。誰にでも自分の好きなコトやモノぐらいい延々と話し続けられなくつちやね」

就職先一覧
日比谷花壇
ワールド
ジャパングラフィックス
第一紙巧
東京スペース
INAX
トヨタ自動車
造デザイン
名芸教職員

* 同窓会名簿より作成したので正確ではありません。

10名
9名
8名
7名
4名
3名
3名
8名



▲最近作の超音波加湿器

シンプルな美しいラインにまとまっている。操作部のグラフィックデザインに苦労しましたと、谷田貝さん。

名芸卒業生を3人抱え 社のポリシーは「シンプルに」 「ベストセラーよりロングセラー」

WORKING
NOW

(有)造デザインアソシエイツ

(有)造デザイン・アソシエイツには社長の昭和49年度工業デザイン卒業2期の江藤太郎さんを含め三名の名芸大卒業生が在籍。現在社員4名。会社創立は昭和63年4月。社のポリシーは「シンプルに」「ベストセラーよりロングセラー」。江藤さんは卒業後、工業デザイン事務所を経て、村上太佳子先生の紹介でミノルタカメラ株式会社に入社。事務機開発部のデザイングループに配属される。以来10年余を過ごし、退社。造創立準備期に同期生で現在名芸大助教授の和田義行さんと意気投合、(有)造デザイン・アソシエイツ発足させる。じつは、江藤さんと和田さんとは卒業制作を共同制作して以来のコンビ。しかし、現在、和田さんは退社している。

会社は名古屋の中心街から近い地下鉄上前津駅から歩いて3分のところにある村橋ビルの2階。30坪程の事務所は声が響くほど。三階にはコンピュータCADルームがあり、米国アップル社のマッキンタッシュIIが活躍中。

「入社時、ミノルタのデザイン部門には上に3人しかいなかつたので、頑張った結果、認められた。名芸では何も教わっていないので、会社に入るのに不安があったのにね。自分で探しながらいくだけだったから、確実にデザインが身についたんだろうな。会社のカラーを出したデザインで複写機を中心に行つてたんだけど、他のデザインもやってみたい、という思いが年々強くなつて:社では随分前から辞めるゾ、辞めるゾって言っていたのに、いざ辞めると決めた時の周りのショックは大きかつたよ。仲人にあたる上司には強く懇意にされるし。ヨーロッパの事務用品見本市など視察に行つたり、気がつくとミノルタの柱になつていたんだね。でも、気持ちは変わらなかつた。だつて、ずっと独立してやるつて思つていていたからね」と江藤さん。

「いまは、そりやミノルタに居た頃とは違つた悩みはあるよね。クライアントが求めているものを過剰なほど表現しなくちやならないし、人を使う身になつて、スタッフへの心遣いが大切だなあつて。自分を見つめる時間や機会も多くなつたね。ほんとに人を使うのは難しい」と苦笑い。

現在、造は(株)INAXをはじめ、10社近いメーカーと取引がある。ちなみにINAXデザイン部の酒井豊さん(昭和48年度一期工業デザイン科卒業)とは

(有)造デザイン・アソシエイツには社長の昭和49年度工業デザイン卒業2期の江藤太郎さんを含め三名の名芸大卒業生が在籍。現在社員4名。会社創立は昭和63年4月。社のポリシーは「シンプルに」「ベストセラーよりロングセラー」。江藤さんは卒業後、工業デザイン事務所を経て、村上太佳子先生の紹介でミノルタカメラ株式会社に入社。事務機開発部のデザイングループに配属される。以来10年余を過ごし、退社。造創立準備期に同期生で現在名芸大助教授の和田義行さんと意気投合、(有)造デザイン・アソシエイツ発足させる。じつは、江藤さんと和田さんとは卒業制作を共同制作して以来のコンビ。しかし、現在、和田さんは退社している。

会社は名古屋の中心街から近い地下鉄上前津駅から歩いて3分のところにある村橋ビルの2階。30坪程の事務所は声が響くほど。三階にはコンピュータCADルームがあり、米国アップル社のマッキンタッシュIIが活躍中。

「入社時、ミノルタのデザイン部門には上に3人しかいなかつたので、頑張った結果、認められた。名芸では何も教わっていないので、会社に入るのに不安があったのにね。自分で探しながらいくだけだったから、確実にデザインが身についたんだろうな。会社のカラーを出したデザインで複写機を中心に行つてたんだけど、他のデザインもやってみたい、という思いが年々強くなつて:社では随分前から辞めるゾ、辞めるゾって言っていたのに、いざ辞めると決めた時の周りのショックは大きかつたよ。仲人にあたる上司には強く懇意にされるし。ヨーロッパの事務用品見本市など視察に行つたり、気がつくとミノルタの柱になつていたんだね。でも、気持ちは変わらなかつた。だつて、ずっと独立してやるつて思つていていたからね」と江藤さん。

「いまは、そりやミノルタに居た頃とは違つた悩みはあるよね。クライアントが求めているものを過剰なほど表現しなくちやならないし、人を使う身になつて、スタッフへの心遣いが大切だなあつて。自分を見つめる時間や機会も多くなつたね。ほんとに人を使うのは難しい」と苦笑い。

現在、造は(株)INAXをはじめ、10社近いメーカーと取引がある。ちなみにINAXデザイン部の酒井豊さん(昭和48年度一期工業デザイン科卒業)とは

先輩後輩ながら同じ屋根の下で下宿した間柄。
仕事の内容は多岐にわたり、障害者のための器具

のリサーチから、コンピュータ端末スキヤナーのデザインまである。それらの仕事を彼を含めた4名のスタッフと外部スタッフがこなす。

谷田貝雅文さんは群馬県館林市出身、昭和51年度4期工業デザイン科卒業。名芸大卒業後、岐阜プラ

スチック工業へ入社。以来プラスチック日用品の開発に携わってきた。プラスチックの金型に対しては幅広い知識を持っている。昨年の暮れ退社、アクトデザインを経て、和田さんの縁で造デザインへ。チーフ・デザイナーとして忙しい毎日を送っている。「30半ば過ぎて、もう一度、自分を見つめなおしたいと思い、退職を決意しました」と谷田貝さんはアッサリ言う。「デザイン科長の故末吉先生には在学中、随分お世話になり、バイトの世話までしていただきました。写真部を創部してクラブ活動が楽しめたなあ。妻籠や恵那峡あたりへの撮影旅行は忘れられませんね。学校では勉強より、いろんな所に顔を出して抜けた友達の輪がなんといつても僕の財産」と語る。

陳貞淑(大原幸江)さんは、昭和60年度13期工業デザイン科卒業後、武藏野美術大学大学院を卒業。

大学院卒業後は実家の岐阜市に戻り家事手伝い。芸を卒業してからも、芸祭には毎年駆けつけているとかで、和田さんに造デザインへ来ないかと誘われまるまで時間はなかった。「音楽が好きなんで、ちょうどその頃はディスコ中毒の真っ最中。和田さんに『一度、オフィスに遊びにおいて』と言われ、ついフランチと。気がつくと造のスタッフになつていきましたね」と陳さんは巧みな話術で話してくれた。デザインだけじゃなく消費者の動向に敏感で、商品企画などのブレーンワーカーができるのが彼女の強みだ。週3回のディスコ通いは伊達じゃない!?

「今日、デザインの仕事ができるのは、岩田先生の『デザイン以外のことにも目を向げなさい』との教えが私の中に生きているからですね。先生のあたたか味のある授業は忘れられません」と語る。

彼ら3名の他に名古屋造形短大卒業で仕事が任せられるコンピュータ使い、松本さんがいる。

「これから造は、自主開発の商品で社会にアピールしていきたいですね」と江藤さんは結んだ。



写真前列

江藤太郎さん

後列左から

谷田貝雅文さん

陳貞淑(大原幸江)さん

松本貴美さん

七宝焼では父に先を越されたので、意地でも違う色を出したい

太田
良明

昭和48年度工業デザイン1期卒業



名芸大を卒業後、東京芸術大学工芸科に入り同大
大学院に進む。東芸では教授一人が学生三人を担当
するぐらいだったので、心の触れ合いがあったね。
大学院では一度教官室へ入らないと外に出られない
ようになっているから、8時とか10時とか遅くまで、
工房で仕事をしてると、よく飲みに連れていくつてく
れた。和があつたね。といって、馴れ合ってなくてく
さ。各専攻教官は手取り、足取り教えてくれないか
ら、技術を盗んだり、自分で問題を見つけて、解決
していくかないと、前へ進まないし、進歩がないんだ
と太田さん。そこでテクニックを盗み専門を深く掘
り下げる術や、自分をアピールすることも学んだそ
うだ。

太田さんの実家は代々七宝焼きの窯元を営む名家

で、彼が四代目だ。「外飯を食わなきや、と、東京にしばらく居たんだけど、東京での展覧会に出演するための制作をきっかけで七宝町に戻ってきたよ」本当は、中学時代にはカーデザインをやりたくて、いまでも中学時代から買い揃えた、自動車専門誌「カーフラフィック」がそのまま、残っているそうだ。「旭ヶ丘高校の美術科に進み卒業する頃には、漠然と七宝焼きをやつて行くような気持ちに、内も外もなつていつたね」と振り返る。「芸芸時代はバカやつて楽しかったね。専攻のことについては、なにもやらなかつたから、東芸に入ってかららギャップで苦勞したよ。校舎がボツンとあるだけの学園で何もなかつたけど、その分芸祭のオカマバーみたいに自分たちで色々考えて面白かったな」

デザイン科を卒業して、デザイナーになるとか、彫刻科を卒業して彫刻家になるとか、絵画科を卒業して学校の先生になるとかいうのが、ごく一般的な名芸卒業後の進路である。しかし、近藤さんは日本画科を卒業して、名古屋でテレビ番組制作会社のディレクターを務める変わり種。

その彼を、仕事場に番組の編集作業をしているところをおじやました。

「今の職についているのは偶然といえば、偶然がない」と近藤さん。名芸を卒業してから母校の名士屋学院高校で週2～3日美術の非常勤講師を続けていた時。サッカー部のデザイン科の学生が代々15、6人位かな、東海テレビのカメラ助手のアルバイトをやっていたそうだ。彼もその中の一人。その元緒

「在学中は日本画の佐藤閑房先生に大変お世話になりました。今でも絵はバリバリ描いていますよ。春秋の公募展の日展、日春展。新日本画研究会には毎年一回新作を描いているそうだ。それに加え、名芸の卒業生でつくった風の会にも新作を描き下ろすという。「日曜日や土曜日、夜にシコシコと風景画を描きますね。仕事柄、人ばかり見ているからホケーッと風景がいいんです」。絵と仕事の二足のわらじを履いた、ライバルと呼べる人が4人いるそうで、同級生の上村洋介さん、山内 瞳（旧姓本間）さん、白井久義さん、一年先輩の松井昭暉さんのお名前をあげてくれた。「彼らがいるから絵を描き続けられるのかもしれないね。ずっと絵を描き続けるのもなかなかいいもんですよ」と気負わず笑う。

「在校生に言えることは、専門外の教室をどんど
ん覗いて、各科に友達を作ることだね。視野も拡が
るし、ものの見方も勉強になる。堅苦しく考えずに
ジャンルにとらわれないことが一番。ネットワーク
を作つて、自分の良き理解者を作ることだね。逆境
の時に、すごく心の支えになるからさ」太田さん自
身、名芸時代の友達とは今も行き来があり、それが
理屈抜きに楽しいと言う。

めが、演出などの制作が出来る人はいないだろ？か
学生では困る、ということで近藤さんに白羽の矢が立
ち、以来10年テレビ業界にお世話になることに。
「ま、丁度そのとき、学校で講師をやつてて、人がト
を評価することに疑問を感じていたから、潮時だつ
たんだだろうね」で、すっぱり講師の道を捨て、東
海テレビ等の嘱託アシスタントディレクターを務め
る。そのときの人脈から構成作家の先生に紹介され
名古屋市広報ディレクターとして、番組「奥様レー
ダー」を手伝う。その頃結婚と、とんとん拍子。以
後、中部日本放送の「天才クイズ」のフロアディレ
クター、「おもしろ経営塾」などを任せられる。現在は
制作会社ITOプロの社員ディレクターとして番組

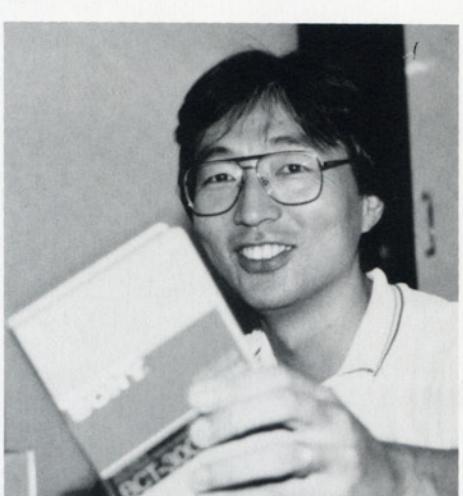
A black and white photograph of a young man with dark hair and glasses, smiling and holding a thick book or folder. He is wearing a light-colored polo shirt. The background is plain.

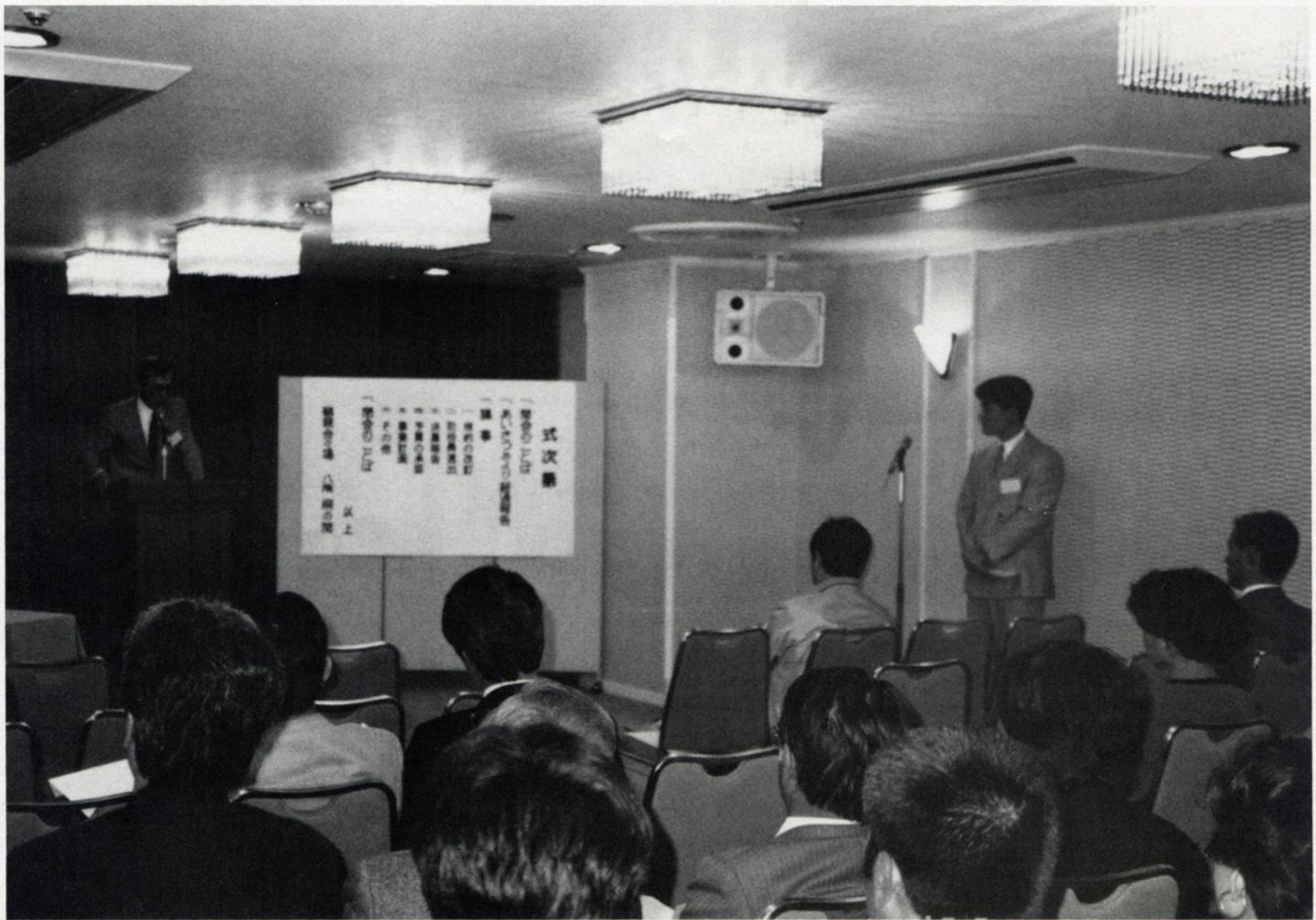
PEOPLE'S TALK

今の職に就いているのは、偶然と言えば偶然だなあ

近藤
哲夫

昭和52年度日本画5期卒業





第2回同窓会総会開催される。

平成元年11月11日（土）名古屋ターミナルホテル
において開催。

規約の改定および、支部細則(新設)、新役員の選出、昭和63年度決算報告、平成元年度予算承認、昭和64年度決算報告、平成元年度予算承認などが行われ、参加者30名全員の挙手により、承認される。

(同封の別紙を参照のこと)

総会終了後、懇親会が開かれ、お酒と料理をつきながら旧交を温めた。宴は大ジャンケン大会などで盛り上がりつつ夜が更けていった。



FROM EDITOR

数々の人達を取り材してみて、出発点は同じだけど、人生いろいろだなと考えさせられた。芸術はその人の血となり肉となつてゐるものだ。在学中から存じあげている1期生の方々の精神の若さは希望の星。肉体的にはだれも老いるけれど精神は若いないと。1期から15期と幅広かつたのもそろそろ歴史の厚み?を感じた。

最後に取材協力してくださいました日比谷花壇の荒木さんをはじめ、みなさんありがとうございました。